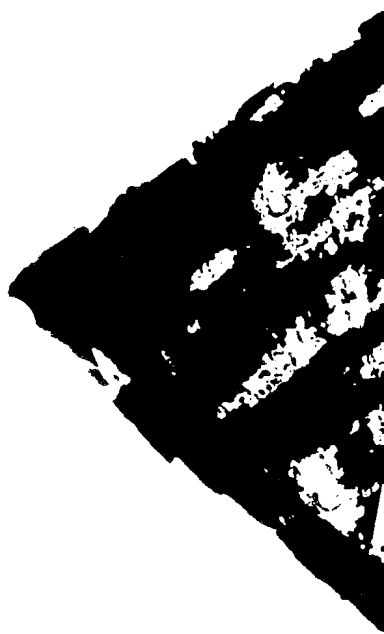


錢形平次捕物全集

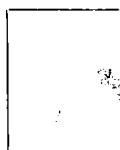
野村胡堂



12

河 出 書 房

錢形平次捕物全集 12



昭和三十一年十月五日
昭和三十一年十月十日
初版印刷
初版発行

定価 二九〇円

著者 野村胡堂

発行者 河出孝雄
東京都千代田区神田小川町三ノ八

印刷者 矢部富三
東京都千代田区神田小川町二ノ四

発行所

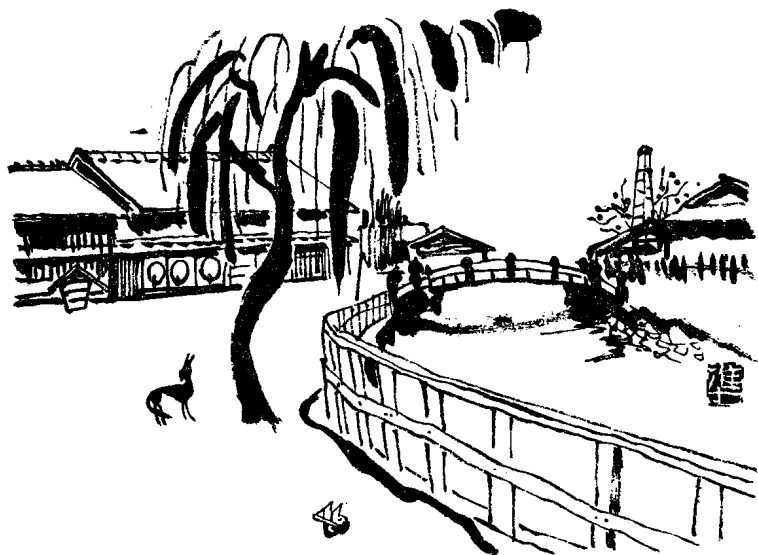
株式
会社

河出書房
東京都千代田区神田小川町三ノ八

振替東京一〇八〇二番
電話東京(29) 三七一―九

目次

怪盗系図	一
第一話 六人斑男	一
第二話 黄金環	三
第三話 邪恋の果	二五
お部屋様お退屈	一八



怪盜系図

第一話 六人斑男

第一人目 礎

「親分、良い心持じゃありませんか。腹は一べえだし、酔い心地も申し分なし、陽気が春で、女の子が大騒ぎをする
と来ちゃ——」

ガラッハの八五郎は、長んがい顔を撫でて、舌嘗ずりしながら、銭形平次の後に追いつがるのでした。

与力筆頭笹野新三郎の心祝いの小宴に招かれて、たらふく飲んだ八丁堀の帰り、二人は八つ小路を昌平橋へ——、筋違御門を右に見て歩いておりました。

「それでお小遣がふんだんにありや申し分がなからう。もつとも、女の子が大騒ぎするというのは、当てにならないが——」

「見くびったものじゃありませんよ、親分。近ごろうっか

り明神下を通ると、色文が降るようでヘッヘッ

「とんだ助六だ、——もつとも八を見かけて吠えつのは、角の酒屋の牝犬ばかりじゃないんだってね。叔母さんは意見をしたらがるし、葉飯屋のおかみは去年の掛けをうるさく言うし、煮売屋のお勘子は——」

「もう沢山、そんないや、なんじゃありませんよ。この節あつしと親しくなったのは、金沢町の近江屋半兵衛の姪お栄——」

「おや、大層な玉を狙やがったな。あれはお前ビカビカする新造だぜ」

「それがすっかり打ち解けちゃってね。この節では、八五郎親分、八五郎親分——と」

「気味の悪い声を出すなよ。あの娘は、当人の前だが、八には少しお職過ぎるぜ。伯父は浪人崩れの金貸しで、一と筋縄でいけそうもないから、十手なんか突っ張らかして出入りしちゃ、後の悪いだ」

平次は目ごろの用心深さに選って、そんな事を言うのでした。

三月になったばかりで、ボカボカする陽気ですが、桜にはまだ早く、江戸の街もこれから、春の夜の夢に入ろうとする亥刻（十時）過ぎの静かなたすまいでした。その時、

「た、助けてエ——」

押し潰されたような女の声、昌平橋をバタバタと渡って、平次に突き当たるように、わずかにかわされて、前のめりに、続く八五郎に抱きついたのは、夜の空気を桃色に燦蒸するような若い女です。

「あつ、びっくりさせやがる」

抱きすくめるように、二三歩退いて、橋の南詰の番屋の油障子を漏るるあかりを透して八五郎は驚きました。

「あ、お前は、お栄じゃないか」

ツイ今しがたまで、親分の平次とうわさをしていた、金沢町の近江屋の姪お栄という、近ごろ明神下をカッと明るくしている評判娘だったのです。

血の気のない顔、少し振り乱した髪、昼のままらしい袷の前袂が乱れて、恐怖と激動に早鐘を撞く胸を細々と掻き抱くのでした。

「あ、八五郎親分、良いところで」

まさに息もたえだえ、そのまま崩折れそうになるのを、八五郎はもういちど抱き留めました。

「どうしたというのだ、お栄」

「伯父が、伯父が——殺されて」

「何？ 伯父さんが殺された。何処だ」

「家の中で、——私がお隣りから帰って見ると殺されてい

たんです。早く早く」

お栄はようやく平静を取りもどしたらしく、二人の袂を引かぬばかりにせき立てます。

「暗いじゃないか」

平次は初めて口をききました。金沢町の路地を入って、突き当りのしもたや、近江屋半兵衛の家は、金貸しらしくお客が入り良いように出来ております。

「とび出すとき、手燭を消してしまいました。待って下さい、直ぐあかりをつけますから」

お栄はもうすっかり落着いたらしく、先に入って火打ち道具を捜しておりましたが、やがてブーンと硫黄の匂いがして、手燭にあかりが移されました。

見ると、入口から奥へ、斑々たる血の痕、平次と八五郎はそれを除け除け、お栄の手から受取った手燭をかざして次の間に踏み込みます。

「おや？」

平次は敷居ぎわに立止りました。

「どうしました、親分？」

「大変な血だが、死骸はないよ」

「そんなはずはありませんが——」

後ろからのぞくお栄の頬の温もりと、香ばしい息が八五郎の首筋をかすめます。

「まア、何うしたんでしよう。ツイ今しがたまで、此処にあったのが」

お栄もさすがに胆をつぶした様子です。

「八、重い死骸を持出して、遠くへ行く隙はなかったはずだ。お前は家の外まわりを捜せ——遠くへ行くには及ばないよ、おれはその間に家の中を見る」

「よし来た」

八五郎は行燈に灯を入れて、それを片手に、裏口から飛び出しました。後には平次とお栄の二人。

「物を盗られた様子はないか」

「そんな様子は見えませんが」

戸棚も押入も、部屋の中も、キッチンと片付いて、少しも取散らばした風はなかったのです。

「金は？」

「それはわかりません。伯父さんが自分で始末して、私などには手も付けさせないですから」

「そんな事だろうな。ところでこの家には、お前と伯父さんとなつた二人で住んでいるのか」

「いえ、番頭さんも小僧もおりますが、番頭の宇八さんは商売用で芝へ行き、小僧の定吉は、遅い敷入で、本所の親許に泊りに行きました」

「そして、お前は？」

「お隣りへ行つて、話し込んでいたんです」

「なんどき時分からお隣りへ行つた」

「酉刻半（七時）少し過ぎでした。お芝居の話に夢中になつて亥刻（十時）の鐘を聞いてびっくりして帰ると——」

お栄はその時のことを思い出したのか、ゴクリとかなづを呑むのです。

声は少し顫えておりますが、顔色はすっかり平静になつて、聰明らしい大きい眼も、紅い光沢の良い唇も、頬から顎へ、首筋にかけての柔かい線も、八五郎が夢中になるように、全く比類の少ない美しさです。

物の言い振りに特色があつて、少しあどけない調子は、二十歳白齒の娘らしくはありませんが、それが一種の媚になつて、人によつては、たまらない愛嬌ともいうでしょう。

その時、

「あッ、大変、こんなところに」

八五郎の声、家の裏のあたりで遠慮もなく張り上げます。

「何が大変なんだ。御近所でびっくりするじゃないか」

平次は八五郎をたしなめながら、水下駄を突っかけて、お勝手口から顔を出します。

続いてお栄、これも血だらけな部屋に、たった一人残る

のが不気味だったのでしよう。

「親分、こいつが大変でなかった日にゃ」

八五郎は裏の空地に突っ立って、手ごろの椎の木を指さしながら、なおもわめき散らしております。その指先をたどつた平次の眼。

「あッ」

さすがに驚きました。

「でしよう、親分。こいつは鳴物入りで驚いたつて驚きませんよ」

そう言う八五郎の言葉はもっともでしたが、椎の木を背負わせて、隙刑型に縛つたのは、血潮に塗れた大男の死骸ではありませんか。

これが近江屋の主人で、お栄の伯父半兵衛の浅ましい姿であつたことは言うまでもないのですが、胸から首を荒縄で椎の木に縛つた上、匕首で突いたらしい首に、千両箱を一つ、頭陀袋のようにブラ下げさしたのは、何んのまじないか怨みか、ともかくにも凄まじい姿です。

半兵衛は四十五六の男盛りで、滑らかな四角な顔と、武術家らしい逞ましい骨組を持った男で、浪人崩れというのは一と眼でもわかります。こんな手剛そうな男の首筋に、匕首を突つ立てるのは、容易のことではなかったでしょう。

死骸が重かったせい、足は大地にいたままで、^{はり}磔風に大手を掲げさせるために、六尺ほどの棒切れを肩に背負わせて、両腕を水平に縛つてあるのは、いかにも念入りです。

「ウーン」

平次の後ろで、物の倒れる音、——振り返るとお栄は、あまりの凄まじさに気を喪つたものか、庭石の上に崩折れております。

「八、お前はその娘を介抱しろ。おれは死骸を取りおろす」

「一人で大丈夫ですか」

平次はそれには返事もせず、まず死骸の首から千両箱を取りおろしました。縄の掛けようなどは、なかなか念入りで、貫々^{くわんくわん}は思ひのほか軽く、開いている蓋を払って見ると、中には五六十枚の小判が入っているだけです。

死骸の首の右側——千両箱を掛けた縄の当ったあたりは、物凄^{ものごろ}い傷口が開いて、血は肩から胸から、腰のあたりまで浸してあります。縄はさして汚れていないところを見ると、死んでしまつてから、此処に運んで、椎^{しい}の木に縛つたものでしょう。

「手伝いましょうか、親分」

八五郎はもういちどお勝手口から出て来ました。

「娘はどうした」

「気分が直つたようです、——こいつは全く女子供に見せる代物^{しろもの}じゃありませんね」

「手を貸せ。ともかく家の中へ入れて、仏様らしくしよう」

「へエ」

平次は縄の結び目から、死骸の身体まで調べながら八五郎と二人、血潮に汚れるのも構わず、縁側に運び入れました。

「おや、変なものがありますよ」

八五郎は死骸の腕——捲^{めく}くれた袖から出た二の腕の外側を見ております。

「何があるんだ」

「変な入墨^{いんすゐ}ですよ」

賽 の 目

「どれどれ」

平次は庭の土の上に置いた行燈を持って来て、死骸の側に寄せました。

「へエ、こいつは、真田幸村^{まきたゆきむら}の紋だ」

八五郎の声の頓狂さ。

「そんな小さい六文銭があるものか、それは賽^{さい}の目の六だ

よ」

「賽の目にしちゃ大き過ぎはしませんか、豆粒ほどの大きさですぜ。こんな大きい目の賽ッころは、玩具屋の看板にブラ下がつている張子の賽だ」

「真物の賽の目の通りには彫れないよ」

むだを言いながらも平次は、念入りにその入墨を眺めております。

「そう言えば、薄く四角の筋彫がありますね」

そんな事を言っているところへ、玄関からヌツと入って来た男がありました。

「おや、お栄さん、何うかしたのかえ」

「あ、宇八さん、大変なことが」

「何をやっただ」

それは三十七、八の瘦せぎすの強靱な感じのする男でした。お栄はこの時ようやく元気を回復したらしく入口の方に這い寄ります。

「伯父さんが——殺されたのよ」

「えッ、あの人、——かつぐんじゃないだろうな。人に殺されるようなヤワな人間じゃない筈だが——」

そう言いながら入って来た番頭の宇八は、手燭の灯りの下に斑々たる血潮や、縁側の行燈の側に、死骸を調べて居る平次と八五郎を見てさすがに仰天した様子です。

「銭形の親分よ、宇八さん」

「そいつは——驚いたね、そんな事と知らないから、芝で二三軒まわって、ごちそう酒で良い心持になって歩いて居たが——」

「お前は？」

平次は死骸から顔を挙げました。隣り町に住んで居て知らない筈はないのですが、近江屋がここで金貸しを始めたのは、ツイ半年ほど前のことで、番頭の宇八とは、往來ですれ違うか、湯屋で顔を合せるほかには、口をきき合ったこともなかったのです。

「奉公人の宇八でございます。——大変なことで」

落着いた調子で、顔色も変えず、眉も動かさませんが、膝に置いた手がわずかに顫えるのを、平次は見のがす筈ありません。

「何処へ行って来たのだ」

「昼過ぎから、主人の申し付けで、取り立てに芝をひとまわりして来ました」

「何処をまわったのだ。行った先の名前は」

「巴町の御浪人で大橋伝中様、宇田川町の呉服屋で相模屋清兵衛さん、芝口二丁目の棟梁で、喜之助親方——それだけでござります」

「晩飯は？ 何処でやった」

「喜之助親方のところでごちそうになりました。お酒まで出て」

宇八は自分の頬に手などを当てるのです。

「集めた金は？」

「二月は不景気で、あまり集りません。三軒とも利子だけで勘弁してくれということ、ほんの七八両取っただけでございますが」

平次の気色の激しいのにおされたものか、宇八は懷中から財布を出して、中身をザクザク鳴らしたりしております。

そのころから騒ぎを聴き付けたものか、夜更けの路地はしだいに弥次馬の数が加わって行く様子です。

「八、お前は隣りへ行って、お栄が行った時刻と、帰った時刻をきいて来てくれ。如才もあるまいが、隣りの人達から、近江屋の内輪のことをよく訊くのだ」

「へエ」

「それから土地の下っ引を、出来るだけ集めてくれ。宇八が立ちまわったという芝の三軒に人をやって一々時刻を聴いて来るのだ。それから、本所の親許に帰って居るといふ、小僧の定吉も呼び出してくれ」

「そんな事ですか」

「用事はうんとあるが、まずそれだけが急ぐんだ」

「へエ」

「あ、危ない、気を付けて歩け。畳の血の痕を踏むと後で始末が悪いぞ」

「おや、血の痕は固まりかけていますよ、親分」

八五郎は畳の上にしゃがみ込んで、血の痕を指で摩つております。

「殺されたのは宵だな、——それはまた後で調べる。早く先刻の手配だ」

「へエ」

八五郎は飛んで行きます。

「お栄、——少しききたいことがあるが」

「——」

お栄は黙って平次の側へ来ると、少しおびえた眼を挙げました。

「お前が隣りから帰って来たとき、家の中に灯りが点いていたのか」

「いえ、真っ暗で、何んにも解りませんでした」

「その真っ暗な中へ入って、灯りを点けたのだな」

「え、なれておりますから」

「灯りをつけた時は、たしかに伯父の死骸はこの部屋にあったのだな」

「確かにございました。長火鉢にもたれるようになって、

首をがっくり前へ下げて」

なるほどそう言えば、長火鉢の灰が血潮を吸って真っ黒に固まっております。

「その死体を見て、お前は真っすぐに昌平橋の方へ駆けて来たのだな」

「え」

「何処へも寄ったわけではないな」

「何処へも寄りません」

「そんな時、当り前なら、お隣りへ声を掛けるのが本当じゃないか」

平次の問いは微妙で辛らつでした。

「でも、面喰ったんです。あんまりびっくりして」

お栄の調子は淡々として何んの技巧もなく、そう言われる意味さえも呑込み兼ねる様子です。

「それにしても昌平橋の方へ来るのは変じゃないか。隣りの家へ駆け込まなくても明神下のおれの家くらいは知ってるだろう、昌平橋へ行くのは、まるであべこべじゃないか」

薄暗い行燈あんどんの側、もう一つの手燭は畳の上に置いて、斑斑たる血痕に纏らされながら、この臨時お白洲しろしづは、物凄くも効果的です。

「宇八さんが帰るころだと思ったんです。伯父さんが殺さ

れているのを見ると、一番先にそんな事を考えて昌平橋の方へ行ったのでしょう。それに——」

「それに？」

「昌平橋の南詰には、番所があります。私はそれへ駆け込む気だったかも知りません」

咄嗟とつさの間に動く娘の心理は、銭形平次の叡智にも及ばないものがあるでしょう。

「親分、お隣りへ行つて来ましたがね」

八五郎は何にか平次に言いたいことがある様子で、あたりを見まわしたり、鼻の穴をふくらませたりしております。

「何んだ、其処で言つてみな」

平次はたいして警戒する様子もなく八五郎を促します。

隣りの部屋には姪のお栄も番頭の宇八も聴いて居る筈ですが、どうせ御近所の衆が岡っ引に話すことくらいは、本人達の耳に入れてもたいして不都合はあるまいと思つて居るのでしょう。

「お栄が隣りへ行つた時刻と、帰つた時刻は、本人が言つた通りですよ。夕食の後片付けが済んだとき行つて、ツイ先刻亥刻よつ(十時)の鐘が鳴ると、——おやもうそんな時刻か知ら、伯父さんに叱られるといけないから——と大急ぎで帰つたそうです」

「あの娘の近所の評判はどうだ」

「悪くありませんよ。開けっ放しで、きりよう良しで、氣が大きいから」

「主人は？」

「近江屋半兵衛は金貸しのくせに大氣で、近所付合いもよく、町内の寄付寄進諸掛りにも、糸目をつけない方で——」

「金貸しの癖に氣の大きい男などは、ちよいと珍らしくはないか、八」

「そう言えばそうですが、——もう一つ親分」

八五郎は言いくそうにモジモジしております。

「何んだえ、八。いやに出し惜みをするじゃないか」

「でも、こいつは大きい声じゃ言えませんか——御近所の衆のうわさでは、主人の半兵衛のことを伯父さん伯父さんとは言つて居るが、あのお榮という女はどうも本當の姪じやあるまいって——ウフ」

「変な声を出すなよ」

「とんだ伯父姪でなきや宜いが、——こいつは人別をみなきやわかりませんね」

八五郎は独りで面白そうにして居るのです。

「番頭や小僧は？」

「宇八は男っ振りも好いが、商売も上手だそうで、あの店は番頭の働きでやつて居るようなものだ——なんて言うのがありますよ」

「それから？」

「小僧の定吉は唯の小僧で、——もつとも十五というにしては柄も大きく、智恵もあるそうで」

「そんな事でよからうよ。半兵衛の前身のことは聴かなかつたか」

「中国あたりの浪人者で、どこか武張ったところがあつたということですが」

「お榮を呼んでくれ」

「へえ」

八五郎が隣りの部屋へ姿を消すと代つてお榮が、少しおどおどしながら出て来ました。

「どうだ、氣分は？ 少しは落着いたか」

平次の調子は平凡で優しくさえありました。

「え、有難うございます。もう大丈夫です。先刻はあんまりびっくりしたんで」

お榮はそういいながら、まだ動悸の納まらぬらしい、胸のあたりを押えるのです。

「お前にきいたら分るだろうが、伯父さんの半兵衛は浪人者だということだが、何処の藩中だえ」

「それが私にはわからないんです」

「姪のお前にか？」

平次も少し詰問的になりました。お榮の調子は少し変り

過ぎていたのです。

「でも、それにはわけがあるんです」

姪が伯父の素姓を知らないわけを、お栄はどう辻褄を合わせる気でしょう。

「そのわけというのは？」

「私は、伯父さんの本当の姪じゃなかったんです、——恥を言わなきゃわかりませんが、私が物心ついた時は、親も兄弟もない、見世物小屋の親方に養われている孤児でした。遠い田舎で水呑み百姓の娘に生れて、食うに困って売られたのか、それとも、親の許さない不義悪戯の果てに出来た子で、里流れになって見世物の親方の手に渡ったか、それはわかりませんが、ともかく、物心ついてから十五、六まで、日本中を渡って歩く、旅の見世物師の小屋で育ち、いろいろの芸を仕込まれて舞台に立っておりました」

お栄の話はかなり奇ッ怪ですが、この女の持っている一種の媚態は、いずれ真面目な家庭で習得したものではなく、長いあいだ見世物の娘太夫で、多勢の客の好みに応じて、自然に会得したものとわかると、不思議でも何んでもなくあります。

「——」

平次は黙ってその先を促しました。

「今から三年前、東海道を旅興行中、親方が土地の顔役に

怨まれて既に命までもという大難に逢った時、伯父の半兵衛に助けられ、それから打ち解けて付合うようになり、とうとう私は納得づくで伯父にもらわれ、姪ということで養われました。旅から旅への暮しもそこでお仕舞いになり、私は江戸に住みついて、何時の間にやら三年も経ってしまいました」

お栄の物語はこれで終りました。整然と筋の立ったもので、近江屋半兵衛との関係——伯父姪の義理もこれで一応は説明されます。

「ところで、半兵衛の腕に彫ってあった、賽の目の六は、ありやどうい入墨なんだ。お前は知って居るだろうと思うが——」

「いえ、何んにも知りません。主家を退職して禄を離れた当座、その日にも困って賭場の用心棒もしたことがあると、笑い話にしておりました。多分そのやくざ付合いの形見じゃございませんか」

そう言われるとそれまでのことですが、博奕打の賽ころなら、刺青にしても二つ並べて彫りそうなのですが、たった一つ六だけを彫ったところに腑に落ちないものがあります。

「半兵衛は腕が出来ていたことだろうな」

平次は妙なことを訊ねました。

「腕自慢でございました。柔術も剣術も、弓も馬もひと通りはやったが、わけでも剣術は自慢だったようで、免許とやらを取って居ると言っておりました」

「それが苦もなくやられるというのは——」

それが平次には呑み込まなかったのです。仮にも一流の免許を取ったものが、何んの抵抗の様子もなく、虫のように刺されて宜いものでしょうか。

「ふだん、付合って居るのは、どんな人達だ」

「あまりお付き合いはありません。御近所の受けは良い方です」

「配偶も子供もないのか」

「ないようでございます」

「金はどれくらいあると思う」

平次の問いは飛躍します。

「それは私にはよくわかりませんが、これで私もどうやら千両分限になった——と言っていたのは、去年の夏あたりでございます——もっともそのうち九百両までは貸した金だが、とも言っておりました」

お栄の言葉はなかなかよく説明が届きます。

「千両はたいしたことだな。ところで、くどいようだが、半兵衛の生国や旧主を何にかの話の序に漏したことはないのか」

「そればかりは申しませんでした。何んでも中国筋のことをよく知っておりましてし、上方なまりのあったところから見ると、上方から中国へかけての、小大名の家中かと思えますが——」

お栄の聰明さも、ここまでは探案が届かなかった様子です。

「もう一つお前がもと居たという見世物は何んという一座だ。親方の名は？」

「明石一座と言いました。親方は明石五郎八、旅まわりの田舎芸人で、江戸などで小屋を掛ける人じゃございせん」

「よしよし、こんどその見世物小屋にめぐり逢ったら、お前のことを話して見るよ」

平次はそんな愛嬌を言うほど心に余裕が出来た様子です。

「親分」

飛び込んで来たのはガラッパでした。相変わらず疲れを知らぬ男です。

「何んだ——もう遅いぜ。宜い加減にして引揚げようと思つて居るところだ」

「それどころじゃありませんよ、井戸端で血を洗った奴がありますよ。まぐろを料った板みたいについていますぜ」

「そうか」

平次は外へ出ました、下っ引二三人、提灯を振りかざして騒いで居るのを見ると、なるほど井戸端の流しは斑々たる血の痕で、ここで汚れを始末しましたと言わぬばかりです。

「親分、刃物は見つかりませんか」

「おれもそれを捜して居るんだが——曲者が持って逃げたんだろよ」

「下手人の当りは付きましたか、親分」

「いやまるで見当もつかないよ」

「あの腕の立った浪人者の主人を——太刀でやつつけるのは、余っぽどの腕前ですね」

ガラッ八もそんな事を一生懸命考えていたのでしょう。

その余っぽどの腕前を持った男が、このへん——八五郎の縄張りの内には居そうありません。

「真っ向から行けば大変だが、そつと後ろから行って匕首でやったかも知れない」

「自分の首筋に匕首を叩っ込まれるまで、黙って待って居るでしようか、あの男は？」

「油断をさしたのだろう、——いや後ろにまわっても何んとも思わせない相手だろう」

「へー」

「ところで、もう一つお前に頼んだことがあった筈だが——」

「お栄がお隣りへ行った後で、半兵衛の達者な姿を見た者はあるかないかということでしょう。姿を見た者はないが、声を聴いた者は二三人ありますよ。お栄が出かける時門口で、——ではちょっと遊んで参ります——と甲高い声でいうと家の中から半兵衛が不機嫌らしい声で——おれ一人にされちゃ不自由で困るから、早く帰るんだぜ——と言って居たそうですよ」

匕首の行方

「親分、とうとう出ましたぜ」

相変らず、脈絡のない事を言いながら、飛び込んで来る八五郎でした。

近江屋半兵衛殺しがあった翌の日の夕景、平次は金沢町の現場で一日調べ抜いて、ツイ眼と鼻の間の、自分の家へ来て一と休みするともうこれです。

「何が出たんだ、明神様の裏から、また狸の子でも出たというのか」

「そんな間抜けなものじゃありませんよ。今日の昼の引潮時に、昌平橋の下から匕首が一本出たんで」

「なに、匕首？」

「こいつは狸の子より面白いでしょう。脂の浮いたドキドキするのが、投げ込むとき見当でも外れたか、うまい具合に岸の石垣の根に突っ立ってたんですって」

「それからどうした」

「近所の子供らが見つけて、石垣から降りて取って来たまではよかったが——」

「その匕首を何処へやった」

「話はこれからですよ。それを見ていたのは通りすがりの樽拾いの小僧で、いきなり子供たちのところへ来て餓鬼大将に渡りをつけた——」

「まわりくどいな、手取り早く、ちをあげてくれ。事と次第じゃ、匕首を追っ駆けなきゃなるまい」

平次はもどかしそうでした。話の発展の様子では、すぐにも飛び出しそうな気組です。

「今から駆け出しても間に合いませんよ。その樽拾いの小僧は、匕首を一朱で買ったんで」

「仕様がねえなア、何んだってその小僧を捉まえたかったんだ」

「つかまえましたよ。小柳町の駄菓子屋に首を突っ込んでいるのを見つけて、昌平橋の自身番に預けてありますア、うんと脅かしたら、ワンワン泣き出しやがって手のつけようがありません。一朱で買った匕首なんか何処へやったか

持っちゃ居ませんよ」

「子供に口をきかせようと思ったら、脅かしちゃダメだ。どりゃ行つて見よう」

平次はみこしをあげました。八五郎について昌平橋まで行くと、黒山の人だかりの中に、十二三のあまり賢くなさそうな男の子が、ワアワア手放しで泣いております。

「その小僧ですよ、親分。匕首を一朱で買って小柳町の駄菓子屋に首を突っ込んでいたのは」

八五郎は相変らず遠慮もなく張り上げます。

「よしよし——お前はここの辺でときどき見かける小僧じゃねえか。匕首を買ったって、叱りもどうもするわけじゃない。そんなに菓子が欲しきや、暴れ食いするほど買ってやろうよ。泣くことはないよ、お前も男じゃねえか」

平次は樽拾いの小僧の背をなでながら、巧みにぎげんを取って行きます。

「——匕首をだれに頼まれて買ったか、その匕首を何処へやったか、それさえ言や宜いのだよ。わかったか小僧さん。——それよ、ここに一朱ある、おれは無理なことなんか頼みはしない、これでへそが抜けるほど好きなものを食うが宜い、——もっとも腹をこわしちゃ何んにもならないよ。宜いだらう、解つたな。フ、フ……そら笑った、——もう泣いちゃいない、なア兄さん」